

祖母が教えてくれた看護

昨年、私の祖母は亡くなった。祖母は末期の大腸がんと診断され、五年前に「今年持つかどうか分からない」と医師に告げられていた。それでも祖母はがんと向き合いながら生き抜き、入退院を繰り返しながら日々を過ごしていた。入院が決まるたびに、祖母は「また入院するって」と、少し困ったように笑っていた。その笑顔は明るいというよりも、どこか申し訳なさや不安を隠しているように見えた。家族に迷惑をかけているのではないかという思いと、先の見えない不安。その両方を抱えながら、祖母は笑っていたのだと思う。私はその表情を見るたびに、何と声をかければよいのか分からなかった。励ます言葉が本当に祖母の支えになるのか、自分の言葉が軽く感じられるのではないかと戸惑っていた。祖母は家族の前ではいつも強かった。「大丈夫だよ」「心配しなくていいよ」と言って、私たちを安心させようとしていた。しかし私は、誰もいない部屋で祖母が涙を流している姿を一度だけ見たことがある。体が思うように動かなくなること、終わりが近づいているかもしれないという恐怖。祖母はその思いを、家族には見せまいとしていたのだと思う。その姿を見たとき、私は祖母の本当の強さと、抱えていた孤独を知った気がした。そんな祖母がよく話していた看護師の存在がある。「あの看護師さんはね、いつもたくさん話をしてくれるの」。処置の合間に世間話をし、祖母の昔話に耳を傾け、時には冗談を言って笑わせてくれるのだという。祖母はその話をするとき、どこかほっとした表情をしていた。家族には言えない弱音も、その看護師には話せていたのではないか。弱さを見せても受け止めてもらえる安心感が、そこにはあったのだと思う。毎日そばにいて、特別なことをするわけではなくても、変わらず声をかけ続けてくれる存在。その積み重ねが、祖母の心の支えになっていたのではないだろうか。治療そのものだけでなく、その人の生活や思いに寄り添う姿勢が、祖母の五年間を支えていたのだと感じている。

本当の看護とは何か。私は祖母を通して考えるようになった。看護は治療を支えることだけではない。患者が抱える不安や恐怖、孤独を受け止め、“強がらなくていい時間”をつくることなのではないか。何気ない会話や、相手を思うまなざし、沈黙の中でそばにいう姿勢が、その人の生きる力になることがある。祖母が困りながら笑っていたあの日々を思い出すたびに、私は思う。患者が本音をこぼせる存在でありたい。笑顔の裏に隠れた思いに気づける看護師になりたい。言葉にならない不安をくみ取り、その人らしく過ごせる時間を支えられる人になりたい。祖母が出会ったあの看護師のように、誰かの心をそっと支えられる人になりたい。祖母の五年間は、決して余命を延ばした時間だけではなかった。その時間をどう生きるか、その人らしさをどう守るかを支えていたのが、看護だったのだと、今は思う。祖母との思い出は、私に看護の本質を問い続けている。そしてこれから先、迷ったときにはきっと、あの祖母の笑顔と涙を思い出さだろう。それが、私の目指す看護の原点である。